

「活動あって、学びなし」 になってはいけない

北海道札幌北高校は、文科省より平成28～29年度「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」の拠点校に指定された。それに伴い、平成28年12月7日、同校で「平成28年度道央ブロックSCRUM研究大会」が開催された。この大会を取材して見えてきた札幌北高校のアクティブ・ラーニングの実践をレポートする。

「型」にはめない

札幌北高校のアクティブ・ラーニングは、平成28年3月のSPARK（スパーク）委員会発足（図表1）に始まる。

まず最初に、札幌北高校ではアクティブ・ラーニングをどのように捉えて実践に移してきたのかを見てみよう。

文科省のアクティブ・ラーニングの定義は図表2の通りである。これは読む人によって解釈は異なるのではないかと。さまざまな解釈が生まれるなかで、懸念されるのは、指導法を一定の「型」にはめこむことだ。

これについて同校の教務部SPARK委員長の福士公一朗先生は、次のように話す。

「アクティブ・ラーニングの本は多数出版されていて、大学の先生によってもスタンスが違います。リフレクションカードを使わないとダメだとか、デイスカッションするときは教員は口出ししないなど、ルールが書いてあります。若い教員はそんな本を読んで信じてしまうこと

がありますが、しかしそれはおかしい。この違和感は大事です」

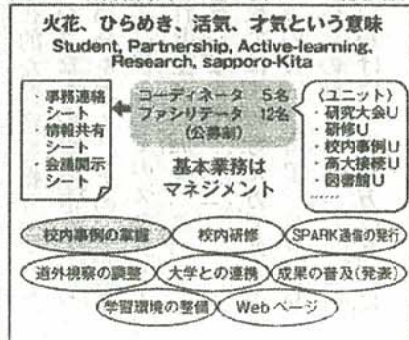
同校では、アクティブ・ラーニングを「型」にはまった教育方法と捉えるのではなく、教員、生徒、教科・単元に応じて多様なものと捉え、「主体的・対話的で深い学び」に向けて探究していこう、という姿勢を取っている。「型」を追うばかりで、学びがなければ意味がない。活動あって、学びなし」になってはいけない。これが、同校のアクティブ・ラーニングの出発点となっている。

進路指導部長の小松旭先生は、「型」にはまった教育にとらわれていたら、形だけが残って、学びが残らない」と警鐘を鳴らしている。

「協働」から「対話」へ

福士先生は、アクティブ・ラーニングとは、「生徒がブレインズオン（brainson）になることだ」と説明する。生徒が、なんとか理解しようとして、熱心に考え、もがいている状況だ。この大会の講演で、北海道大学高等

図表1 札幌北高校のSPARK（スパーク）委員会



図表2 アクティブ・ラーニングの定義

図表2 アクティブ・ラーニングの定義
 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。
 （文部科学省 用語集より）

教育研修センター特任准教授の山本堅一先生は、「生徒の目が輝いている状態」という表現をしていた。
 では、生徒をブレインズオンの状態で学習させるためにどうしたらよいのか？ そのための授業デザインを考えていくのが教員の役割になる。
 「ブレインズオンは、すでに

